

第19回日本古典籍講習会 参加報告

吉永栄子

1. 初めに

2021年7月6日(火)～7月8日(木)にZOOMによるオンラインリアルタイム配信で「第19回日本古典籍講習会」が開催された。

本講習会は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館と国立国会図書館共催で開催されたものであり、日本の古典籍を所蔵する機関の職員を対象として、書誌学の専門知識や古典籍の整理方法の技術修得を目的としたものである。

本稿ではその講義内容を4つの内容に分けて報告する。

2. 講義一覧

- 「はじめての古典籍 付) 書誌用語概説」
- 「くずし字について」
- 「写本について－奥書・識語を中心に」
- 「版本について－刊記・奥付を中心に」
- 「蔵書印について」「装訂・料紙について」
- 「表紙の文様について」「江戸の出版文化」
- 「明治の出版文化」「資料保存について」
- 「国文学研究資料館における資料利用と資料管理について」
- 「日本古典籍総合目録データベース概要」
- 「日本古典籍総合目録データベースの検索」
- 「国文学研究資料館における和古書目録の作成」
- 「歴史的典籍 NW 事業の概要について」
- 「国立国会図書館における和古書書誌データ作成」
- 「国立国会図書館における古典籍資料の電子化」
- 「図書館における資料保存1」
- 「図書館における資料保存2」

3. 研修概要

(1) 古典籍とは何か

古典籍を扱う上で、「古典籍」という術語や書誌学

という学問、写本と刊本の特徴、目録のあり方などをまずは理解する必要がある。では、そもそも「古典籍」とは何か。『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999年）において「古典籍」とは、「古い書物の中で特に内容・形態ともに優れているもの」であり「江戸末期以前の写本・版本全体を明治以降のものとは区分して用いる場合も出てきている」と定義されている。

古典籍を取り扱う上で必須の教養となるのは「くずし字」であり、それぞれの仮名のもとになった字母を覚える必要がある。古典籍の書誌として基本になるのは「装訂」と「料紙」であり、本の作製年代や、製作環境・目的などが推定できる場合もあり、本の性質を知る上では不可欠の要素となっている。

日本古典籍の大きな特色としては、①装訂の種類が多様であること、②古い時代の装訂が長く継承されたこと、③写本に特有で版本には見られない装訂、版本にもあるが分野が限られる装訂があることが挙げられる。

(2) 写本と刊本（版本）について

古典籍は「写本」と「刊本（版本）」に大別される。写本とは原則としてタテに連鎖し、人の手で書き写していくため、無意識による誤写や意識的な改編により1つとして同じ本は存在しない。そのため諸本を系統立てることが重要であり、大きさや表紙の色ではなく、巻頭や本奥書・書写奥書部分が重要な判断材料となる。

一方、刊本とはヨコに広く展開し、同じ本は存在しないと思われがちだが、実際は入れ木による修訂や版元の交替なども少なくないため刊・印・修の見極めが重要となる。刊本の場合は本の形や表紙の文様や色が内容を規定する傾向があるため、未整理の古典籍は本の大きさによって山分けするとおおよそのジャンルに分類することができる。

また、早くから印刷によって書物制作が行われた海外とは異なり、日本では写本には版本と異なる価

値が認められて長く制作された。写本と版本が並存した理由としては以下のようなものが考えられる。(堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読み』勉誠出版、2010年)

- ① 写本を版本より上位に見る意識があった。
- ② 有名人あるいは公家・書家などの筆蹟を尊重する意識があった。
- ③ 写本でないと流通できないテキストがあった。
- ④ 一般への流布を嫌うテキストがあった。
- ⑤ 多くの人が自分自身で書物の制作をおこなった。

(3) 資料保存について

図書館サービスとは蔵書を基盤として提供される情報サービスである。そのため資料をできるだけ長く「利用できる状態」に保つことが重要であり、「状態の良い資料」であれば劣化・破損の予防を、「劣化・破損した資料」には手当てを行う必要がある。

近年における保存のキーワードとしては、①大量保存と段階的保存、②予防的保存、③酸性紙問題、④将来的保存、⑤総合的有害生物管理が挙げられ、保存修復の原則として、①原型保存・②安全性・③可逆性・④記録の原則が存在している。

資料の劣化・破損要因としては地震・水害・温湿度・カビ・虫損などの「外的要因」や資料そのものが酸性紙であることやマイクロフィルムであることから発生する劣化の「内的要因」、不適切な取り扱いや複写・展示を行うことによる劣化・破損の「人的要因」がある。講義内で紹介された予防策としては主に以下のものがあげられる。

- ① 外的要因：環境管理の実施。湿湿度の管理や空調設備の整備・点検、清掃、UV カット蛍光灯の使用、保存容器の使用、カビや虫対策として IPM (総合的有害生物管理) の導入など。
- ② 内的要因：脱酸性化処理や放酸、包材交換、媒体変換(複製物の作製)など。
- ③ 人的要因：利用者や職員への教育・指導の実施、注意喚起、適切な排架など。

また、資料の補修に関しては各館の「保存方針」のもとで手当てする必要がある資料を「選別」し、再び利用できる状態にするために必要な手当を「過不足なく」行うことが重要となる。

(4) 資料の電子化

講習会では、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画(歴史

的典籍 NW 事業)」や国立国会図書館における古典籍資料の電子化について解説が行われた。

国文学研究資料館の歴史的典籍 NW 事業については、2014年度から2023年度の10年間で、開かれた学術研究基盤の構築・共同利用の促進と新たな人文系の共同研究モデルの創出を目標とし、①日本語の歴史的典籍画像データベースの構築、②古典籍を活用した国際共同研究の推進、③国際共同研究ネットワークの構築を3つの柱として実施しているものである。講義では「新日本古典籍総合データベース」の紹介や古典籍のデジタル化の進捗状況などについても解説いただけた。

一方、国立国会図書館における電子化については、デジタル化の目的として①原資料の保存・②電子図書館サービスの実現・③メタデータ充実等による資料の発見可能性向上・④オープンデータ提供による新規コンテンツの創出・⑤災害による原資料散逸・破損への備えが挙げられ、国立国会図書館デジタルアーカイブやデジタル化の工程について紹介が行われた。

国文学研究資料館の歴史的典籍 NW 事業については本学図書館も参加しているため、改めて詳細を確認することができ、有意義であった。

4. 終わりに

本年度より古典籍を含めた貴重書に関する業務に従事することとなり、基礎から学びなおすために本講習会に参加させていただいた。特に、資料の扱い方や修理・保管方法については知識が浅く、本当にこのやり方でいいのか迷う部分もあり、今回の講習会を通して資料の扱い方や保存方法、劣化等が生じる要因、保存修復の原則などについて学べたのは非常にありがたかった。

講義内では、くずし字や表紙の文様に関する演習問題に取り組むなどもあり、自身の知識が不十分であるということを再認識できた。図書館の業務は書庫の狭隘化や資料の劣化、虫損・カビ、デジタル化など早急に対処しなくてはいけないことが多いので、今回学んだことをしっかりと役立てていきたい。

本稿で使用している文言については、一部、講習会各講義資料の文言をそのまま引用させていただいている。私の理解不足により誤った記載をしている部分がある可能性もある。その場合はご指摘いただければ幸いです。

本講習会に参加する機会を与えていただいたことに改めて感謝申し上げます。

(よしなが えいこ 図書館事務室)